

薑

能村 研三

師系燦燦

今瀬剛一先生の「対岸」が創立三十五周年を迎えた。十月に記念号が刊行されたが、二百四十頁に及ぶ大冊で、「三十五周年を迎えて」と題した巻頭言には、三十五年前の思いが書かれている。

十五年前、四十代の私は作句力が大変旺盛でした。自分の作品発表の場が欲しいと思いました。また私の周囲にはたくさん仲間がいます。この者たちを育てたいと思います。こうしたいから主宰誌「対岸」創刊を決意したのです。

この決意を最初に伝えたのは他ならない能村登四郎先生です。あの日の先生の一瞬だけ見せた寂しげな戸惑いの表情を今もありありと思い出しています。それでも先生は次の瞬間にはつきりと言って下さいました。「やりなさい、頑張るんですよ」、私は胸が熱くなつて「先生ありがとうございます」というのが精一杯でした。

今瀬先生は、ひと月に百句位の俳句が出来るかと水戸から車で鳩亭を訪ねてこられ、登四郎の選を受けられ

校正の朱筆奔放虫しぐれ

文机の木理渦巻く厄日かな

待宵や身ばなれの良き白身魚

照り降りのせはしき唐辛子真つ赤

真贋はどうでも良しと鳥兜

昼月の吹かれぎんなん落つる日よ

十三夜壺中に水を韻かせて

何するとなく手の胡桃艶を増す

登高や身の内の靄霽らすまで

薑や山の豆腐は肌理粗き

た。登四郎の選は大変厳しくあまり選が貰えない時は、数日後に推敲を重ねた百句をもってこられていたのを記憶している。

私は初学時代に「沖」の若手句会のある「舵の会」で指導を受けた時代がある。この時も今瀬先生は夜東京で行われる句会に労を惜しまず水戸から駆けつけて下さった。

私の第一句集『騎士』は、今瀬先生が十七頁にも及ぶ温情溢れる跋文で俳壇へ送り出して下さった。

先日、協会の用件で今瀬宅を訪問することになった。コロナ禍もあって実に二年ぶりにお会いしたのだが、お元気の様子で安堵した。お宅で歓談のあと水戸までBMWを運転して先導され偕楽園、千波湖にご案内いただいた。偕楽園ではつい最近に建てられた今瀬先生の句碑も拝見した。

紅梅は水戸の血の色咲きにけり 剛一
三角形のおむすびの形をした石にこの句が刻まれていた。

先生は私より一回り以上歳が離れているが、今なお俳句に情熱を注がれる姿勢に励まされた一日であった。

能村 研三